

猪犬と登る猪猟の頂点へ

猪猟の上級編

⑧

田宮 治

限界に挑む

人様から見れば、できそうにな
いこの難題（頂点）であっても、
私はこんなご時世だからこそ、あ
えて挑戦して必ずやり遂げ、絶対
に成功させなければならないと思
っている。

「猪犬と登る猪猟の頂点」は誰
に頼まれたものでもないのだが、
物事の成功には「夢の目標」を掲
げ、それに向かって必死で挑戦し
続け、決して諦めないことが何よ
りも大切である。

たかが「猪犬完成」や「猪猟道
構築」であっても、その頂点とな
ると、誰もがたやすく達成できる
ことではない。私は夢の頂点まで
を発信し続けることで、忘れられ
滅びかけている狩猟界に、何とか

生き残る活路を見つけ出し、一人
でも多くの若者たちの心に訴え、
一緒に参戦していただくことで、
猪猟の楽しさや猪犬の素晴らしさ
を体験してもらいたいのである。

そして、猪猟人でなければ絶対
に味わえない大猪との対決や、激
戦を完勝する猪猟の醍醐味を十分
に堪能していただきたいのであ
る。

今までの辛く苦しい猪猟を、最
短の二秋で面白くて楽しい俺流猪
猟の近道に乗せて進化・改良する
ことで、ぶち当たる難題を克服
し、何としても一流猪猟人にして
やりたい。そして、素晴らしいこ
の猪猟を次世代に繋げたい。そん
な一念から独断先行の私案とし
て、頂点までの道案内を断行して
いるのである。

私にとって、この頂点までの道

順は、若い頃から登り続けて来
た、慣れ親しんだこだわりの猪猟
道であり、信じて疑わない大切な
夢を実現する手段であり、鍛練の
場である。

単独猪の未熟者なればこそ、
人様に言えない大失敗や挫折のど
ん底から自力で這い上がる何より
も良い方法である。それが上達の
決め手であると信じ込み、何度も
何度も繰り返し登り続けて来た最
高の「猪猟虎の巻」である。

この虎の巻を山彦会千葉支部に
持ち込み、誰もが目標とするよう
な素晴らしい猪猟人になってもら
い、今度は自分たちが猪猟の楽し
さを次の若い世代に教え、導びい
てもらいたいと思っている。

猪猟はもとより、何事を達成す
るにも繰り返し挑戦することが
大切であり、決して諦めないのが

頂点までの大事な要件となる。
努力するとか、挑戦するのは当
たり前のことで、誰でも猪猟を志
したからには、猟技術にしろ犬芸
仕上げであっても、どこまでやり
通したかが重要となってくる。

猪猟も入門当時と、頂点付近の
限界に挑戦するのでは、頑張り
の意味が全く異なってくる。細心
の思案をめぐらし、攻めに徹しな
ければならないのが頂点の戦い方
である。

例えば、攻めること一つ取って
みても、頂点付近の戦いともなれ
ば並の攻め方でどんなに頑張った
としても、猪に必ず攻めの盲点を
突かれ、見事に逃げ切られてしま
う。繰り返し追うことで、犬た
ちと猟人が猪の動向をよく知ると
いうことは、逆に猪もまた逃げる
という点で考えられないほど知恵

がつき、難攻不落の猛猪と変身するのである。

二秋の挑戦となった山彦会千葉支部では、まさにそんな重大な局面にぶち当たっていたのである。

十二月末ともなれば、若者たちの実力も全く申し分ない成長を遂げているが、一方、猪もまた、箱根や獲り過ぎでめっきり少なくなっている。

そんな中で、生き残った数少ない猪は、どの山でも猪獵人に追いつてられ攻めまくられているので、小物といえども決して侮れない。まして大物ともなれば、餌不足と猛暑のためか、減量作戦？まで加わって恐ろしい強さになっている。

こんな大変身を遂げた猛猪が相手なのだから、どのグループも例外なく苦戦を強いられている。しかし、山彦会千葉支部ではそんな言い訳が許される場合ではない。私はこの最悪な状況下で、猛猪との知恵比べという前代未聞の難門克服に向かつて、持てるすべての猟技を押し出して、一戦一戦を大切に戦い続けている。

この苦戦で学ぶ技術こそが、本物の実力になるのである。猪獵を極め頂点を目指すからには、苦境こそ最高のチャンスと受け止め、この限界に挑むことである。

私が猪獵でここまでこだわっている最大の理由は、物事の限界に挑む時の難しさであり、その重要さを知ることだと思っている。口癖のように「何度でも繰り返して、できるようになるまで確実にやってみることだ」と言い続けているのは、どんな達人であつても、一度や二度の挑戦で成功したのではない。素晴らしい猪獵の極意とか、猪犬の一流芸であつたり、猟道が一番便利な近道でさえも、何度も繰り返し挑戦していく厳しい鍛練によって出来上がる完成品だからなのである。

この極意や一流芸を完成して、堂々と宣言するまでには、長い年月をかけた苦労や失敗の積み重ねがあつて勝ち取った戦利品のようなものだと思つている。猪獵道には確立した完成までの筋道がない中で、ただただ挑戦し続けて頑張っただけでつかみ取ったかけがえのない数多くの極意は、限界に挑み続けて勝ち取った戦利品である。

これを武器に猪獵の頂点に立つた者でなければ、決して味わい知ることができない。その獵人ならではの猪獵道であり、誰も真似することのできない独自の牙城になっているのである。

私はそんな独立独歩の牙城、つまり頂点までの礎となつている大切な猪獵の極意の中から、猟道の近道となつたり、止め犬獵で「この一芸（一瞬を射る技）なくば猪犬での止め現場は完勝で飾れない」と思っている大事な猪獵法を取り上げ、この一秋で何としても完成させ、分かつてほしいと頑張っているところである。

私はそんな独立独歩の牙城、つまり頂点までの礎となつている大切な猪獵の極意の中から、猟道の近道となつたり、止め犬獵で「この一芸（一瞬を射る技）なくば猪犬での止め現場は完勝で飾れない」と思っている大事な猪獵法を取り上げ、この一秋で何としても完成させ、分かつてほしいと頑張っているところである。

私はそんな独立独歩の牙城、つまり頂点までの礎となつている大切な猪獵の極意の中から、猟道の近道となつたり、止め犬獵で「この一芸（一瞬を射る技）なくば猪犬での止め現場は完勝で飾れない」と思っている大事な猪獵法を取り上げ、この一秋で何としても完成させ、分かつてほしいと頑張っているところである。

一瞬を射る

山彦会千葉支部は、一秋で猪獵のほとんどを克服し、素晴らしいまでに成長してくれた。残る紙一重が、勝負を分ける頂点付近の接戦を必ず勝ちに繋げる戦い方の繰り返しであり、何度も挑戦し、くだいほど説明した上で体験してきた。

そんな猪獵の仕上げ段階では、とっさの判断が猪獵の成否を決定づける大事なことになるのである。当たり前だが、猪獵人なら誰でもそんなことくらい分かりきつた事実である。

では、そのとっさの判断を正確にきつちりとできるようにするにはどうしたらよいかということになると、なかなか大変なことで、簡単ではない。

基本的には、猪獵の頂点付近の戦いもまた、例外なく筋書きのないドラマである。猪を撃ち獲るといふ猪獵の最終目標を達成する過程をよく考えれば分かるように、激戦の中での猪獵人の行動はすべてが緊急を要するとっさの判断にかかっている。

私が一秋ではできなかったこの事案を、二秋目の課題にしたのは、まさにこの辺での猪止め現場対策を何度もやって見せ、実戦体験を重ねることで体に叩き込むという鍛練を敢行しているのである。猪獵で最も難しく会得しにくい



この真竹藪が猪の棲処（すみか）だ。この中に入らないことには勝負にならない

のが、止め猪との対戦現場で自ら下す行動指令であり、一瞬にかけ猪への寄り付きと、一瞬を射ることである。しかし、こんな肝心の猪猟の決め手までもが、人それぞれの手法があり、独自の猟法となっている。

追い犬は追い犬での撃ち方、止め犬には止め犬での撃ち方があって当然なことで、人それぞれの猟法に物言うつもりはさらさらでないが、この当然過ぎる攻撃が、実戦

猪猟をやっている者にとって、猪を追い詰めたところからが最大限の難事となる寄り付きと近射が待ち受けている。誰でも一瞬を射るなどは当たり前のことだが、この当然過ぎる攻撃が、実戦

ではなかなか思いどおりにいかない極めて重要な意味を持つ案件となる。私が言い続けている「繰り返し一瞬を射る極致に到達するまでの説明のようなものである。私が猪犬を作り、仕上げて苦労の末に田宮系を確立したのも、単独猪猟に人生をかけて挑戦してきたのも、その目的はただ一つ、理想の猪犬による納得の止め猪猟である。つまり、我猟を完成して心から楽しむ

（上）ヨシ号×富士美号。このくらいの時に言葉をかけ、撫で回してならすのである。何度も何度も、毎日やるのがポイント

みたかったのである。若い成長期にきっちり目標を立てて真面目に取り組み、身体に叩き込み覚えておけば、七十歳を過ぎても十分に止め猪猟を楽しめる。その上、この年になっても若者たちと一緒に獵場を駆け巡れる喜びを証明できているのが、何よりの成果だと思っている。

猪猟人ならば誰でも「そんな努力は当たり前だ」と思うだろうが、納得の猪犬を作り、思いどおりの猪猟を完成させて、人様に教えたり接戦の完勝の喜びと一緒に味わい、お互いの信頼感を高めて心より楽しめるようになるまでには、並の努力や頑張りではたやすくできるものではない。

ましてや、誰もが夢見る猪猟の頂点までの道案内となると、その課題は犬芸完成に始まり、猟技術や体調管理と数多くの難題を克服した上で、強い根性を押し出して猪猟完成に欠かせない個別の猟技術を総結集して一丸となって猪猟の最後を仕上げる。

つまり、「画竜点睛」（晴はひとみ）ともいうべき「我猟の点睛」



(上)このくらいの大物になると、すぐ止まる。だが、そこからが攻撃の合図で、藪中の戦いとなると、並の犬たちでは何頭かけても傷を負い、最後にはやられてしまう。こんな猪をシロ号、マロ号、ヨシ号なら、いつも完勝するところが凄い。



めきめき力を付けているシロ号。大猪でもビクともしなくなった

が金陵の安楽寺の壁に二頭の白竜を描いて、その一頭に睛を描き入ると、たちまち雷電が壁を破り、その竜は雲に乗って天に昇ったが、他の一頭(竜)はそのまま残っていたという話である(『水衡記』)。

私はこの故事の教訓が大好きで、「苦勞の末の、ここ一番」という決め時に思い出して起爆剤のようになっている。

十年くらい前になるが、仔犬訓練のいろはの中で、「猪犬仕上げの『点睛』は『愛』の一字を入れることで見事に完成するのだ」と他誌で発信したことがある。今でも「仔犬訓練のすべてが愛情を糧に咲くものだ」という考えに変わりはない。

何事においても完成するための大切な最後の仕上げは、この一点(点睛)で決まるところに重要な意味があると思うからである。

この猪犬訓練の理念は、多くの猪獵人に共感を得たようで、今でも「仔犬が素晴らしくなったよ」「こんなことで困っているが、どうしたらよいだろう」といった連

を何としても実現しなければならぬのである。

その大事な「睛」を入れて完成させる作業が、現在必死で敢行している山彦会千葉支部の実戦なのである。猪獵もこのあたりまで登り詰めると、最後の仕上げであり、通用する技法もまた極致の技でなければならぬ。

この分かりにくい最高レベルの技法の修得と使い方こそが、上級

編で私が何度も実戦して見せて完成したい重要な点なのだ。言い換えれば、この大事な猪獵の最後の仕上げとなる「睛」を入れる作業が、私が説明し続けてきた重要な点であり、苦勞の寄り付きの末に送り込む夢実現の一発なのである。

当然、狩獵の目的は一発で決まるといえるほど簡単なものではない。特に止め猪獵の現場では、一刻を争う真剣勝負である。待ったなしの緊

画竜点睛

昔、梁の張僧繇という絵の名人

絡をいただき、いつも元氣をもらっている。これは今後の猪猟向上や猪犬作りの自信に繋がるものなので大変喜んでいられる。

私は今まで自分がやってきた成果を基に、名犬は努力の賜物だと思っている。また同様に、物事の完成も極意の達成も、すべてその人なりの頑張り、挑戦し続ける先に見事に咲くものだと思うので、改めて視線を変えて最終編の後に投稿したい。

私は猪猟人のために何かの役に立ったり、楽しく読んでいただけてるものでなければならぬと思っている。そのために、あえて故事を引用したのは、「画竜点睛を欠く」(全体は良くできているのに大事な一点が不十分である)との格言どおり、お座成りの成果でごまかして終わらせたくないからである。

私の猪猟法や猪犬仕上げの「基本中の基本」は、この故事の意味そのものである。つまり壁に描いた二頭の竜は全く同じ天性の能力を持ったものであったが、その一頭の竜に名人が手を掛け「睛」を入魂したことによって、天性の能

力が見事に開花して一気に天(頂点)に昇ったが、名人の手が掛からない(訓練なし)一頭の竜(睛のない)は、「そのままの状態が残っていて、ただの竜で終わる」という教訓である。

このような故事や諺は、時代を越えて人の道を示し、教え続けている。しかし、人生を変えるほどの名言や格言であったとしても、大切なことは進取の精神を持って自分流に改良して見事に使いこなすか、何もやらずに見過ごすかという、その人なりの判断にかかっている大事なことなのである。

物事の完成や目的達成に不可欠なその時々の難題を乗り越える問題点、つまり「点睛の一点」は自分で努力し発見した上で挑戦し、創意工夫しながら繰り返しの上で挑戦し、によって少しずつ高め、自分流に極限まで仕上げ、堂々と人様に見せられる極意まで磨き完成する以外ないのである。

私は何度と同じように猪猟の頂点までの道順を発信し続けてきたつもりだが、いよいよ頂点付近の難所である。登山で例えるなら、頂点付近の難所や崖にぶち当た

り、これがなければどんな達人であっても登り切れない梯子や鎖である。

この梯子や鎖に成り代わり、これがなければ猪猟の頂点は極められないのが、何度もやって見せて言い続けている猪猟の極意の決め技が、止めた猪への寄り付き方法と、一瞬を得る刺し止め撃ちの極意ということになる。

この二大タイトルを猪猟の上級編でど真ん中に据え置き、何度も繰り返し、くどいほど仕上げてきたのである。

その真意をズバリ言い切るならば、どんな状況下であっても、考える前に身体が自然に反応し確実に的を得られるまで、繰り返しによって鍛え上げて確立する「反射神経」の完成にある。

何事にも、この繰り返し訓練の大事な目的は反射神経の育成であって、どのスポーツでもこの鍛練こそが上達の基本である。

私は長年猪犬を使い単独猟をやってきて、この二点の大技が自在に繰り出せないことには、安全も安心もないと思っている。だから無意識のうちに、これら一連の大

技や小技を自在に使いこなせるようになっていなければ、とてもじゃないが猪猟の真の楽しさには味わえないと思っている。

目前の頂点に見事到達するまでは、この辺で待ち受けている意識や難所をしっかりと学び、いつても堂々と完勝して心より楽しめる猟技を身に付けておきたいものである。

私が「猪猟の頂点」と夢の目標を設定したのは、猪猟を志したすべての人が達成していきたく思っている努力目標である。基本的に頂点などと言ってみたところで、最終の目標ではない。さらなる「高嶺の月」を追いかけるためのスタートラインに立ったと思うのが妥当であろう。

人の道には当然、終わりや頂点はないと思っただほうがよい。事実、目標は追えば追うほど高くなり、それでもなお、追い続け挑戦し続ける先に夢の目標が広がるのである。常に夢の目標を掲げ、それを追い続けるところに人生の意義があり真の成長もあると思うのである。

(つづく)